

読める。工夫された序詞、なかなか。

このシネマ登場人物全て皆幸せ得ざるを不思議がる  
評 佐藤博之

だれ一人幸せにならない映画だっていいじゃないか、映画批評に対する反論のかたちをとっている。「映画」ではなくわざわざ「シネマ」という語を使っているのは、作者独自の現代に対する抵抗的姿勢の表明だろう。批評に対する反論もまた、「幸せ」を日常的なレベルで見ようとする現代への抵抗的批評と読む。

冬の河越えれば旅ゆくところあり青砥、曳舟、高砂  
を過ぐ 奥山かほる

電車で川を越えるとなんとなく旅行くような気がして  
くるといのである。冬の川だから、なおさら気分が増幅されるのだ。三つの駅名が出てくる。京成電車の駅名  
のようだ。私は詳しくないが、順番がちがうのではない  
か。もし違っていたら、せっかくの一首なのにもつたない。

陰謀のひとつも持ってなさそう南国にやすやす替わ  
る為政者 屋良健一郎

第四句「国に……」はいかが。「に」を消すか、「国に  
て……」とした方がいいのではないか。国家戦略を持た  
ない国を風刺するのはいいが、いま一つ切れ味がほし  
い。

葉の陰に啼く声一羽の鶴が友を呼ぶらむ赤き実のあ  
り 高山美智子

意味的には第二句の途中でいったん切れる。つまり、「啼く声・一羽の」と句割れのかたちになり、そこが表現面でのポイントになっている。鳥の鳴き声を友を呼ぶ声と聞きなすのは、「古畑の岨（さか）のたつ木にゐる鳩の友よぶ声のすぎ夕暮 西行」をはじめ、古典和歌に多く見られるところ。

一人称所有格の「の」本日は何度言ったか数えつつ  
帰る 植山俊宏

自分が薄くなった気分だろうか。自分の輪郭がぼやけてしまった感じかもしれない。今日は「われ」の存在感が薄かったような気がする。そんな思いの帰路である。分かる気がする。

御御御付 祖母の来ていた割烹着 冬の朝の厨（く）の記  
憶 森屋めぐみ

「御御御付（おみおみおつけ）」「割烹着（かちぼうぎ）」「厨（く）」、現代の高校生には読めないだろうこれらを、わざと振り仮名無しとしている。この表記もまた作者の意図で、レトロな味を出すのに一役買っている。昭和初めを体現したような「祖母」のイメージがくつきり読める。

子のなき嫁のこれからを思ふ冬の日をどうしていま  
すか姑は日向ぼこ 塩地や糸子

息子に死なれた母が嫁を気づかっている場面。口語が手紙の文体を連想させて、とくに「冬の日をどうしていますか」の部分は、嫁への心づかいを直接呼びかけているような呼吸で、読者の心にしみる。